

たきのゆ

地域とのご縁大切に

「あーいお湯やったいた近くの男性へはわ。ほんのりとピンク色。三日に一度は来るかな。肌をした人たちが、口昔からやけど、きれいにビートのすに腰掛ける。掃除されているところが手足を伸ばせる湯船でゆ。好き」と話す。内風呂がったりと疲れを癒やした。普及した現代でも、なじみ客たちが足を運んでく。せいか、どのお客もさっ。み客たちが足を運んでく。ばりとした表情。福井市。足羽二丁目の銭湯「たき。創業当時は、男女ともゆ」は七十八年にわた。湯船一つの小さな銭湯だ。り、地域の人たちに明日。三代目の長谷川多聞さん（左）は、幼かったの活力を与えている。昭和三十年代を「一日中

老舗物語

しにせものがたり

銭湯 たきのゆ3代目 長谷川多聞さん

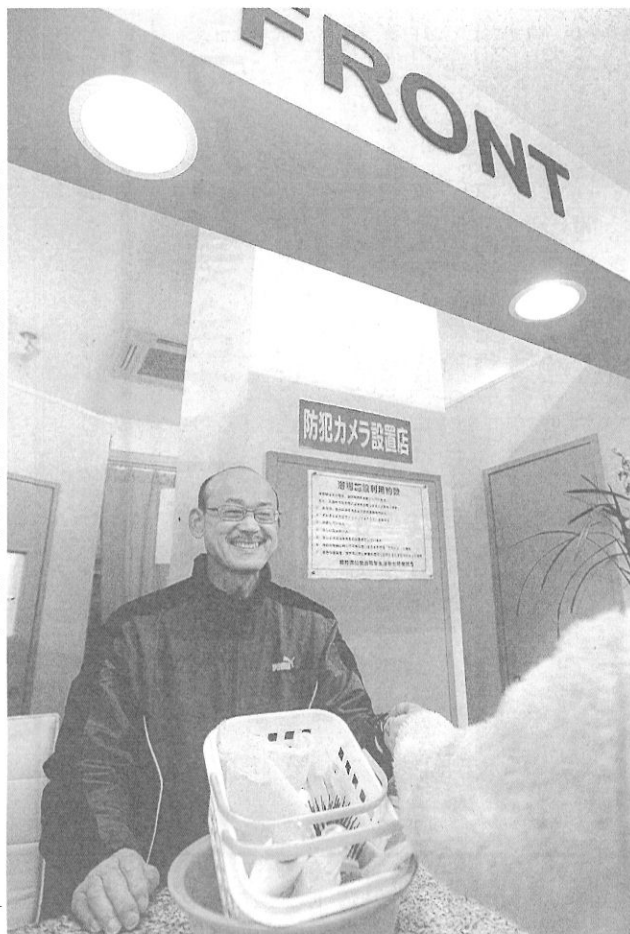
年、父の任二さんへがを呼び込むことに成功した。愛犬や愛猫のスナツプを持ち寄るお客がきた。家庭に風呂が普及。だがその後、公共の大人浴施設やスーパ銭湯写真屋は約三十枚に。おは店の増改築プラン。銭湯が乱立し銭湯業界は厳客同士の話のタネにもなっている。

湯に寂しさが漂い始めていた時期で「このままではいり貧になる」という父の危機感が伝わった。店を継ぐことを決めた。を結び直す。縁の湯に。なる。父母が切り盛りした店の姿でもあった。派になっても、お客への思いは創業当時と少しも変わらない。（尾崎隆宏）

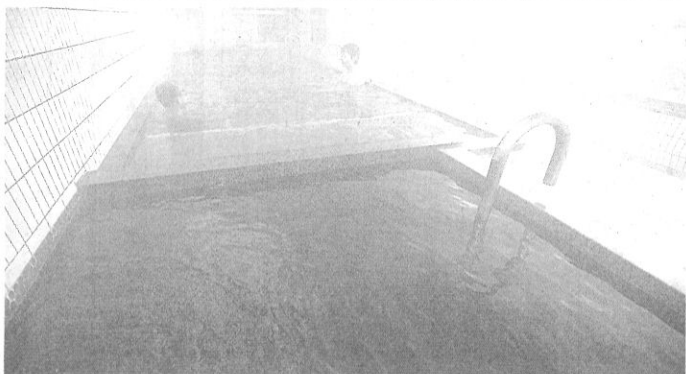
長谷川さんは明治大を卒業後、大手建設機械メ。湯、水風呂など増やし「カーに就職。約七年後た。お風呂のデパート」わが家のペット自慢。思いは創業当時と少しも

混み合っていた。僕は近所の「福居さんにお風呂の作法を教えてもらっていた」と記憶している。銭湯は地域の社交場だったのだ。

駐車を広げ、風呂の。足羽二丁目の銭湯「たき。創業当時は、男女ともゆ」は七十八年にわた。湯船一つの小さな銭湯だ。り、地域の人たちに明日。三代目の長谷川多聞さん（左）は、幼かったの活力を与えている。昭和三十年代を「一日中



①「現代版番台」で常連客の接客する3代目の長谷川多聞さん
②薬湯（手前）などさまざまな風呂が楽しめる浴室。いずれも福井市のたきのゆで



【あゆみ】1935（昭和10）年、故長谷川市朗衛さんが現在地で創業し、県内では老舗に入る。風呂は約10種類と充実、地下70センチから上げた井戸水を沸かす。入浴料は大人400円、児童120円、6歳未満の幼児60円。営業時間は平日が午後1時～翌日午前1時。土曜と祝日は午前7時に開店する。水曜定休。県内の銭湯は後継者不足などで現在、27軒に減っている。